

陸軍上等兵)を指導員に任命して、軍事教練や銃剣術の指導を開始した。

六月に入ると、校舎新築のことが本決まりとなり、四平省日本人学校組合の手で、太平山と四標樹の中間にある高深畑跡に、敷地の造成が始められ、これと並行して本部の南側二百以上の位置に、大型の煉瓦工場がつくられ、大勢の現地人勞工が入って煉瓦の製造が開始され、工事は冬に入って本格化した。(つづく)

記録

ふる里 佐伯の陶芸展

期日 十一月二日・三日
会場 佐伯文化会館
主催 佐伯史談会

ふる里へ佐伯市(南海部郡)の歴史的な陶芸、現在楽焼を楽しんでいられる十人ばかりの方々の作品などを、一堂に集めて都市の人々に見ていただくこと。この決定があった。まず先に手がれたことは、波越焼の葉物と久部焼のものとの探索であった。水が谷焼はもう確認していた。そして上久部の窯跡の発掘、破片採集をした上で、実行計画が清田会員の手で進められた。

「まゐろしの波越焼」を、若しまぎれのうたい言葉として幕をおけたが、多年陶芸を手がけて来られた平田土半先生のおがげと、お寺さんや佐伯出身の清家先生、外数人の方々の格別なご快賛によって、予想をはるかに越す盛況であった。

中でも、本匠村の高橋智会員は、久部の窯跡から発掘の陶器片の土色・うわぐすりから、自定覆蔵の水さしとよりにかえり、箱書「久部村直五郎」の作者まではつきりした久部焼を確証、追加展示して下さった。尚二日

日目は、波越の窯跡の発掘破片から、これこそ本物と思われ、大きな壺を出陳下さった。

しかし点数については、やはり楽焼が最も多く、平田先生の休養が日数多く、船頭町の米本夫へのもの、福泉寺、願成寺の両和尚、養賢寺老師お三方のものは閑雅で観衆の心をとりえた。異彩を放っていたのは別府市の清家先生の饅頭窯の複製品、筆麗眼を奪うばかりであった。

畑野浦の保壽所の子才幼児の陶板画の作品多数も、今後ふる里陶芸の進展に、一つの示唆を示していた。また、孫生衛大坂本の本格派、裁窯の作品も、これからの生長がたいに期待されるすべしなものであった。

当初七〇点前後とふんでいた出品点数も百三十点を越し、參觀者も両日で延べ八百人ばかりという盛況であった。殊にうれしかったことは三日午前十時からの「お話し大きく会」には、福泉寺和尚・養賢寺老師も臨席下さり、平田先生・中村義雄氏・清家亮先生、本匠村の高橋智氏などからも、それぞれ体験を通してのお話がきけたことであつた。その座談会についている間も參觀者はつづぎ、作品をながめながらも体験談に耳をかたむけていた。

佐伯の陶芸は、歴史的な伝統こそ貧乏けれど、土をこねて、器をつくってこれを焼く技術は、必ずやふる里佐伯の風土の中で、これから花と咲くことである。そのためにも、この度の史談会の催しが、何分のお役に立ったなら幸いである。

尚、この展示会に格別のご支援とご協力いただきました前記の方々、水が谷の矢野好信氏、文化会館の皆様さんへ、心からお礼を申し上げます次第である。

